
異常と日常。その中で。

ぴーせる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者また
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異常と日常。その中で。

【著者名】

ぴーせる

【あらすじ】

俺は日常が嫌いだつた。
嫌いで嫌いで本当に嫌いで
でも、あいつに会つてからは……。

(前書き)

作品完成日：2006／09／04

日常が嫌いだ。

なんて、ちょっとしたありきたりなセリフを吐くのもいやだ
らないが、それでも俺は嫌いだ。

つまらない。

本当につまらない。

俺がそう思つよつになつたのは、物心ついてから。

幼稚園の頃だつたか。

それは突然に訪れた。

つまらないんだ。

毎日、毎日同じよつこ遊園し、同じよつこお絵描きをして、同じ
ように友達と遊ぶ。

何が面白いといつのだろ？

もしその答えを知る人がいるなら、それを俺が納得できるよう
四百文字詰め原稿用紙百枚前後の容量で的確に説明して欲しい。

とんだ比喩だが、それほどまでに俺には到底理解できないのだ。

のござつと毎日同じように暮らして何が楽しい？

あんたは老後を楽しむ老夫婦どもか。

それとも今まで死と隣り合わせな生活をしていたせいで日常が恋しいのか？

まあ、そんなのはござりますい。

日常とは酷く単調なものだ。

ただただ時間が過ぎ去り、その過ぎた時間を直面して蓄積していくのみ。

俺はそこに変化を求める。

日常からはずれた“異常”。

それを求めた。

が、世界はそう簡単に変わっちゃくれない。

この広い世界の一要素でしかない俺がそれを望んだといひで、世界を異常で埋め尽くせることなど出来るわけがない。

でも、その逆なら起きたのだ。

つまらない中学校生活を終え、大して期待もしていなかつた高校生活で、それは起きた。

*

(……つめりねえ)

予想通りだ。

特に面白いことなんてもうたくない。

もつ高校にきてからしばらく経つが、実質的に高校など中学校と
あまり変わりはない。

さすがは義務教育猶予といつたところか。

青く広々とした空の中を浮かぶ、まるでパンのようになった形をした雲を仰ぎ見、俺は家路へと向かっていた。

靴に引っかかつた小石をそのまま蹴り上げる。

ぐどい風景。田舎風景。

昨日もこの道を帰つたし、一昨日も、そのまた前の日もさうだつた。

「おはよう

やう口に出してみれど、周りには外周に勤しむ運動部の連中とジージーいぬせこヤミしかおらず、ただ俺の声はそれらにかき消されていった。

(はあ、何か面白いことでもないものか……)

例えばいきなり隕石が地球に衝突するとか、北極の氷が溶けきつて海面がメートル単位で上昇するとか

死にたくないとも、それぐらいの異常が恋しい。

自ら得にいく異常も好ましいが、望まざとも手に入る巨大な異常の方がよっぽどだ。

何かこう、俺個人ではとても抗えないような突飛的異常が起きないものだろうか。

そう考えていた矢先、それは突然に突っ込んできた。

そう、俺に“突っ込んで”きたんだ。

俺がいつもとは違つて一人で下校していたとき、何者かが俺を吹き飛ばすような勢いでぶつかってきた。

そこは曲がり角。

俺が右折しようとしていたところは塀が高くなつていて、向こうがどうなつてているのか見えない。

俺の通つている高校は俺の家からは近く、だから俺は歩きで高校に登下校していた。

いつもと違う気分を味わおうといつもツルんでいる友達とは帰りの時間をすらし、これも何か気分を味わおうと珍しくワイヤッシュボタンを第一まで締めていた。

そんないつもとひとだけ違う学校へ、せりひ違う出来事が舞い込んできた。

胸の辺りにどんっと強い衝撃が来ると共に、今度は何故か頭の方にも衝撃。

同時というよりも衝撃が移行したという感じ。

頭を振られ、少しずきずきと鈍痛がする。
が、痛みよりも。

(よつしゃー!)

と、内心ガツツポーズをして喜ぶ。

一瞬垣間見ただけだが、相手は女。

前方を一切気にせずに走っていた姿が見えたから、恐らく一心不乱にどこかへと向かっていたのだろう。

そんな女との衝突。

もしかしたらベタな恋愛ドラマのような展開になり、うまくいけ

ば運命的な非日常恋愛 異常恋愛に発展するかもしない。

「うつしたことで知り合い、また何かの縁で出会い、運命を感じ惹かれあつていく。

普通に考えればありえないことだらうが、つまらない日常のせいだらうか、俺はこんな些細なことでも異常な方向へと想像を働かせていく癖がついていた。

ありえるありえないのどちらにしろ、こんな風に曲がり角で思いつきりぶつかることなど、それ自体が滅多にないのだ。

それだけでちよつとした異常とも言える。

俺は強かに打つた尻に痛みを感じながら、その異常候補を見やる。が、それは俺が考えていたそれの斜め上をいく異常だった。

田の前を見ると、そこには“俺”がいた。

「あたたた……」

しりもちをつきながら痛そつに尻をさすつてゐる“俺”。

ワイシャツ姿の制服で、珍しく第一ボタンまでしっかり締めており、入学当時に買ったばかりの学生バックをぶつかった拍子に道端へと放つている。

一瞬その光景が信じられなくなり、俺は田元を擦つてからもう一度“俺”的顔を見た。

ボサボサの整えられていない短髪に、頬の下の方にニキビが二つ。

背は高くなく、かといって低くもない。

中肉中背。

強いて言つなら普通。

この普通すぎてムカつく姿を鏡で見て、俺は何度ため息をついたことだらうか。

そんな見飽きた俺を、俺が見間違ははずなどない。

間違いなく“俺”が俺の目の前でしりもちをついていた。

「誰、なの……？」

そう男の声で女言葉を発した“俺”。

だが俺はしゃべっていな。

しゃべっているのは相手なのに、俺がしゃべっている。

正確には声質が若干違うような気もするが、まるで録音したときの自分の声のような、他者から聞いた俺の声。

何度か聞いてみたことがあるから、それが俺のものだと分かる。

(何が起きたんだ……?)

俺にはこの状況がよく理解できない。

が、これだけは分かる。

とんでもなく面白いくことに巻き込まれた。

認識すると同時に心持ちが沸き立つ思いがした。

これ、かなりすげくなえか?

突然ぶつかってきたどこの誰かが、俺と同じ姿をした、口調がオカマ。

どうやらぶつかる手前に見た女は、俺にぶつかってこなかつたらしい。

状況からして、その死角から来ていた俺に酷似した“俺”が俺にぶつかつたみたいだ。

すっげえおもしれえ状況!

「誰だよ、あんた!」

胸の奥がむずむずするようなわくわくとした気持ちを抑えようとなく、俺はしりもちをついていた状態から身を乗り出すよつこじ

て“俺もどき”に聞いた。

「あ、あなたじゃ、誰なんですか？？」

お、こちにも俺と同じ姿である」と云がついて驚いてやがるな。

田の前の“俺”は田を見開き、まるで信じられないものでも見た
かのような表情で恐る恐る俺に顔を寄せてくる。

うん、面白い。

なんて面白いんだ。

「の似方は双子よ。」

まるでドッペルゲンガーに遭遇したよう。

ああ、良かつた。

今日は友達と帰る時間をずらして。

今日は学校がある日で。

いや、生まれてきて良かつたかもしれない。

なにしろ、こんなにも普通じゃありえないことが起きてるんだ。

世界に三人しかいないと言われている自分のそっくりさんに、今

「うつむけの日本で会えるなんて奇跡とも言えよう。

もしかしたらこの俺のそつくりさんと友達になれ、そつくりさんと俺との違いを比べて話してみたり、この人を友達に紹介して自慢したり。

そんな色んな異常とも言えることが出来るかも知れない。

そう考えるだけでうきつきとした気持ちがどんどん湧き出でてきて、いつもたつてもいろいろくなり、俺は立ち上がった。

そして俺は自分のスカートをはたき、ついたであろう土ぼこりを払う。

……スカート？

「スカートッ！？」

思いがけず声を上げながら、慌てて自分の身体を見下ろす。

そこにはうちの学校指定のセーラー服。

紺色の襟に白のワンドラインが入つてあり、その内側に巻かれているのは赤色のスカート。

下には白のセーラー服の下地があり、さらに見下ろせば深い紺色のスカート。

見れば見るほど、明らかに自分の服装ではない。

靴はこつもの俺なら運動靴をはいているのと、今は革靴。

茶色がかつたローファーで、女子がよくはいていたいなデザインのもの。

で、そつして見下ろしてみると俺の左右の視界を塞ぐ大量の黒い糸のよつな……そつ、髪。

これは髪だ。

黒々とした色をしており、その質はつせとしている。

綺麗といつてもこじがらいの代物。

それが俺の髪にしてはあまり長くなく、顔を正面に向かって髪を見る

見てみれば肩にかかるほど長い髪。

それが俺の頭からはえていた。

俺が女装？

女装するなりあるで異常なりの面白があるが、今はそんなことはない。

その女装の下には、到底俺のものとは思えないほど細い腕や足が伸びており、胸には僅かながらの膨らみ。

無駄毛の一つも見られないそれより、俺が女の身体をしてこないと

示していた。

そして田の前には俺と非常に似た
ちをついている。

いや、俺そのものがしりも

見間違いでなければ、俺はこの角でぶつかった手前、一瞬だが女の姿を見た。

確か、服装はつちの制服。

まさに今の俺が着てこるそれと同じものだ。

さりに、俺がこうして立っている場所は俺のいた道ではなく、女
が突っ込んできた道側。

俺とまったく同じ容姿をした男がしりもちをついてこっているのは、俺
が歩いてきた道の方。

これらから推測できるのは、

(身体が、入れ替わった?)

背筋をゾクリとした快感が走りぬける。

(なんなんだよ、これは?)

もしかして俺の田の前にこるのは、『俺のやつらさん』じゃなく
て、俺そのもの。

実は俺は入れ替わっていて、俺はこの身体の女子になっていて、

田の前に立る俺の中身はその女子……？

信じられない状況に、視線を幾度も俺の身体とこの女子の身体を往復させる。

どれだけ見ても田の前にいる俺は俺だし、見下ろすセーラー服はセーラー服のまま。

間違いなく、俺たちは入れ替わってる！

ぐつぐつと煮え立つような興奮。

田の前には明らかすぎる異常な状況。

こんな素晴らしいものを田の前たちにして、この俺が黙つていられるはずもない。

身を乗り出し、田の前の“俺”的肩をひつ掴む。

「なあ、お前の名前は？ 名前はなんて言つんだっ？」

「えつ……か、川村梨奈ですけど……」

なるほど、今の俺は川村梨奈という女子の身体に入れ替わっているのか。

うんうん。

なんだよ、入れ替わったもん。

ふざけやが。

異常にも程がある。

“ひつしたんだよ、”のありえない状況は。

面白ご。

面白あれる。

ぐだらないと思っていた高校生活の帰り道、まさかこんなにも楽しそうな異常事態が起るだなんて夢にも思わなかつた。

無神論者ながらも神に感謝しきつじやないか。

わづだ、ひつせなりもつと楽しもひじやないか。
わづかくの異常。

これを楽しまなくて、いつ楽しめるところなんだ。

明日か？

明後日か？

そんなの待つていられない。

一度と来ないかもしれないチャンスよりも、田の前に起きてこら
異常事態だ。

「えっと、あなたは……？」

田の前の俺が、おどおどした様子で話ねてくれる。

「お、これも面白い。」

俺は普段いつも性格をしてくるものだから、いつも風でおど
おどするひとなんて滅多にない。

前に面白半分でやつてみたこともあったが、それは例外だらう。

演技力といつものがないせいか、なぜかじっくりなってなかつた
しな。

さて、ともあれ田の前の“俺” 梨奈への返答だ。

俺は梨奈に向手を差し伸べ、言ひ。

「俺は三上隆司だ。これからどうしへ？」

「み、三上さんですか？」

対し、梨奈は俺の名前を聞いて驚き俺の差し伸べた右手を無視。

別にそれはそれで構わないのだが、どうも梨奈は俺の名前を知っている様子。

「何で俺の名前を……」と言いかけたところが、その言葉の意味のなさに気がついて喉の奥へと引っ込んだ。

別に俺を知つても不思議はない。

なぜなら俺は高校生活初日から数日間、休み時間をフルを使って同学年のやつら全員に挨拶しに回つたのだ。

「三上隆司だ、よろしく」と。

理由なんて決まつている。

それが俺にとつての異常だからだ。

俺は中学時代、それほど目立つやつじゃなかつた。

日常に飽きあきとして、どうせつまらないのなら固執する必要もないこと、やや登校拒否気味でさえあつたほど。

もしそんなやつがいきなり目立つとなれば、それは立派な異常になる。

それに、挨拶に回れば俺を楽しませてくれそうな異常なやつが見つかるかもしれない。

そういうた日論みで、俺は入学初日に挨拶回りをした。

だから、たぶんこの梨奈とこの女生徒にも挨拶をしてくると思う。

まあ俺は覚えちゃいないが。

「三上さん、ですかあ……。……んん?」

すっかり置いてきぼりといった感じを受ける田の前の俺、中身は梨奈だが、まあ放っておくとしたよ。

説明せども事実が確定している時点で、事態を飲み込むのは時間の問題。

そんなことよりも、今はこの異常を楽しむ妄想だ。

入れ替わったからには、やつぱりここいつ関係で色々とやらせられ面白い出来事がたくさん降り注げば。

まず、もじこのまま入れ替わったままだったら、俺は梨奈の家に帰ることになる。

見た目が梨奈なのだから、俺のうちに帰るわけにもいかないからだ。

そして、じつこの家族ないし友達は俺のことを梨奈だと思つている。

なにせ見た目が梨奈本人のものだから、今は俺の身体に入っている梨奈に協力を仰がなければその誤解は解けないだろう。

つまり、必然的に色々と関わつてくるのだ。

だから名前を名乗るとさ」「『これからよひじく』と言つておいた。

さてさて、一体何をしてこの異常を楽しもつか。

せつかくの女子の身体だ。

男と女の身体の違いといづやつを、この身体で楽しんでみるのも十分過ぎるほどに面白い。

あ、いや待てよ？

せつかく俺は梨奈といづ女子になつたんだ。

それならば、梨奈といづ個人をとことん演じてみても面白いかもしねない。

例えば、俺の田の前に座り込んでいる本物の梨奈に「私が梨奈よ！」なんて、俺が本当の梨奈の役をする。

梨奈がどういづやつだか知らないが、まあ知らなくともなんとかなるだろ？

なにしろ俺は梨奈本人の身体なのだ。

どれだけ性格が一変しようが　いや、ある程度までだな。

ある程度の範囲内なら、ちょっとくらいおかしかろうが、この身体が俺を梨奈本人であると証明してくれる。

つまり梨奈の身体を乗っ取る、ひいてはその存在そのものを奪う行為だ。

しかしそうなったとき、本物の梨奈は自分が梨奈だと張ることだろう。

なにせ自分といつ存在が赤の他人である俺に奪われようとしているのだ。

俺とは逆に普通の思考をしていっているのなら、そんなことをさせまこと躍起になるのが常。

だが、身体が丸々入れ替わってしまったなどと誰が信じるだろうか。

常に何かしらの異常を望み続けていた俺でさえ信じられないような出来事なのだ。

日常に慣れ腐った世間の連中が、それを解説するなど想像すら出来ない。

むしろ精神病の類だとかそんな無情な判断をし、正しいはずの梨奈を異端として扱う姿の方が目に見えている。

そうして三上隆司であることを義務付けられた本当の梨奈は生きていくため、いずれ時間と共に自らを三上隆司であると偽るよう

なるだらう。

身体だけではなく、心も入れ替わつてしまつ。

究極の入れ替わりを余儀なくされるのだ。

もし本当にそつなつたとしたら、それはとんでもない異常。

誰にもバレず、しかし本人同士は熟知している異常。

その日常からかけ離れた情景を頭に思い浮かべるだけで心が踊る。

……が、これは現実のものにならないだらう。

俺が本当の梨奈を演じよつとするにも、既に田の前にいる本物の梨奈に俺の名前を教えてしまつたのだ。

といつのも、この計画の最終目標は完全に入れ替わること。

完全に入れ替わるといつのは、梨奈に自分が三上隆司であるということを芯から信じ込ませるといつことだ。

しかし梨奈には、俺が三上隆司であるといつことを名乗つてしまつた。

名乗つてしまつたからには、状況から考えればすぐに身体が入れ替わつてしまつたことなど容易に想像がつくだらう。

そして想像がついてしまえば、梨奈は自分が三上隆司であるということを信じることが出来なくなる。

信じさせたためには「私って本当に川村梨奈だったの?」と疑心暗鬼に陥らせる必要があるのであり。

疑心暗鬼になれば、様々な経路はあるだろうが、どこかしりで「もしかしたら三上隆司だったのかもしれない」という結論にたどり着くだろう。

そうなれば、自分の身体が三上隆司のものである現実が後押しをし、いざれは芯から「自分は三上隆司だった」と信じ込むのだ。

だが、今の梨奈は入れ替わったという事実を認知してしまっている。

まだ首を傾げながら思案しているようだが、時間の問題だろう。

そうなれば、完全に入れ替わることなど出来ない。

入れ替わった事実を知れば、「もしかしたら……」なんて疑心にたどり着かないのだから。

まあ、これは相當に外道な思い付きだ。

いくら面白いにしても、人の人生をめちゃくちゃにするとなると、異常を求める俺でも罪悪感が疼く。

でも、それを実行できないとしてもやっぱり面白い。

こんな状況に陥ることがなければ、考えすりしなかつた異常な想像だ。

異常好きの俺としては、その想像だけでも十一分に興奮してくる。
「いやして入れ替わったこと 자체がかなりの異常。

ものちつともおもしれえ異常なんだ。

そんな思考に一度区切りがついたといひで、ふいに声がかかる。

「どうこいつですか……？」

どうやら思考に詰まつを見せたらしく見かけは俺、中身は梨奈が首を傾げる。

まったく、この表現もまたややこしい。

俺と一言に言つても、俺の人格の方を示すのか、身体の方を示すのか分かりづらうし、梨奈の場合もそれは同じ。

本物の梨奈を示そつとしたら、先述のようにやや遠回りに感じる表現をしなければならないのだ。

でも、それがまた面白い要素の一つ。

「こんなことでややこしこと思つだなんて、こんな異常がなければありえなかつたことだからだ。

まったく、病みつきにならうな面白がだ。

「ちょ、ちょっと笑わないでください！」

おつと、顔に出てたのか。

俺は指で自分の口に触れ、口が笑つてることを確かめた。

うん、とっても一層一層してたな、俺。

やつぱり俺は異常が大好きらしい。

存外にこんなにも笑みをたたえていたのだから。

蛇足だが、梨奈の身体の唇がふるんと柔らかかつたことにも感動した。

「あの」

俺の姿をした梨奈が、梨奈の姿になつている俺に話しかけてくる。

「今、三上さんは私になつていて、逆に私が三上さんになつていて
んですよね？　ということは今私は三上さんの身体の中に入つてい
るわけで、三上さんが私の身体の中にいるから、私の姿をしている
のは三上さんで、三上さんの……ああもうー。訳分かんないですー。」

話の途中で頭を抱えられても、聞いている俺が一番訳分からない

のだが。

でもまあ大体言いたいことは分かる。

要は入れ替わってるんですね？ と聞きたいたのだから。

「そんなの、自分の身体を見れば分かるじゃないか」

そう伝えると、梨奈は自分の身体を見下ろした。

そして、

「入れ替わってる……のかな？」

たぶんな、と俺も付け加えておく。

俺だって、現状から考えうる推測でしかかつてないのだから。

もつとも推測と言つても、ほとんど確定したようなものだ。

互いに「入れ替わっているかもしない」と相手の顔、つまり元の自分の身体であろうそれを見て思つてはいるのだから。

やばいな。

いついた入れ替わり独特のややこしさが、愛しいほどに楽しい。

そう思つた途端、梨奈が「笑わないでください」と怒鳴つてきた。

ふむ、俺は嬉しそうな顔に出るのか。

初めて知つたぞ。

これから注意してみるか。

それにしても梨奈のやつ、あまりこなじめでないでさはないだらうか。

自分の、本来は俺の身体を見下ろしてはちょっと触り、触つては手を引っ込めて、またすぐに手を出して引っめる。

傍から見るとずいぶんと怪しいその仕草。

恐らく俺の身体に興味が湧いて触ろうとしているんだろうな、と思つて梨奈を見てみると、じきりの視線に気付いた梨奈が何故か頭を下げて謝つてきた。

何で謝るのだろつと聞くと、

「その……勝手に身体とか触られちゃつて……嫌ですよね？」

だそうだ。

なんとも面白い考え方をするんだな、梨奈は。

触られるのは自分も相手も同じなのに、なんだか自分が悪いことをしているよつたな顔で俺に謝る。

律儀といつか生真面目といつか。

それなら俺も思いつきつ乳をまたぐる勢いで触つてやろうつかと思つたが、それは梨奈の思いに反していふ気がするのでやめておいた。

俺は紳士だ。

「何でまた笑つてゐんですか？ そんなに私、変ですか？」

「どうやらまた笑つてしまつていたらしく。

ちよつと不機嫌そつこ俺らしくない丁寧な口調で話す梨奈。

なんだか気持ち悪いな。

今の俺の姿はワイシャツのボタンを第一まで締めており、そこには丁寧な口調が加わつてゐるため、なかなかの真面目君に見えなくもない。

が、俺はその中身が俺自身だったことを知つてゐるからか、ビックリ感がある。

今まで真面目腐つてたやつが高校デビューと称していきなり金髪に染めてきたときのいっぴいっぴいな感じの逆パターン、とでも言えばいいだろ？

あれ、ここにつっこまんな真面目キャラだっけ？ と誰かに聞いたくなる衝動に駆られる思いになる。

「や、面白かった」また一いやけてきた。

急いで口元を隠すも、隠す前に見られたかそれともこれで詰られたか、また不機嫌に眉尻を上げる。

その姿が普段の俺に似合わぬ滑稽さで……。

うふうふ、十一分におもしれえ。

やつぱり異常は最高だ。

だが、いのまま思考ばかりとこいつのもつまらない。

さつきから思考してばかりなのだ。

同じことをしてたら飽きるのは経験上既も承知。

なら、飽きる前にそれをやめる。

それが一番の解決策だ。

思考をやめるなり、じゅあ行動しかない。

俺は、未だにしつもをついた状態のままの梨奈に向づく。

「『れから』トートショウゼー！」

「…………はい……い……い……い……い……い……い……い……！」？

見事にビッグデータをきかせた俺の声が返ってきた。

おいおい、俺はこんなリアクション期待しちゃいないぜ？

まつたく、何を驚いているんだか。

せつかくここまですこい異常なんだ。

ならもつと異常にしようじやないか。

こんな異常な状況に置かれた普通の人間なら、俺の予想ではハチヤメチャに気が狂つたりすると思つ。

が、俺が普通に収まるわけがない。

俺だから」で一捻り。

異常に異常を重ねる 入れ替わりデータとこいつお楽しみを加えてやるのだ。

うん、異常な状況で異常なデータ。

実際に面白がつだ。

そんな俺に反して、梨奈の心の俺は口を何度もパクつかせ、明らかに「驚いてますよ」と物語っている顔をこひらに向けて目を見

開いていた。

ややあつい。

「何でそつなんですかーー.?」

怒つてゐるときにも敬語な梨奈はひょと極口。

普通、怒つてゐるときは敬語とか使わないんだけどな。

せつげなくそんなことを頭の片隅で考えながら、俺は、

「楽しそうだから」

と返事。

すると、しつこくこちらに梨奈はまた口をパクつかせた。

身体が俺じやなかつたら可憐いんだろつた、この仕草は。

いやあ、入れ替わる前に見てみたかった仕草だな。

元の身体に戻る氣なんて、今のところわからなくな。

しかしこくら口をパクつかせる行為に面白みがあつたとしても、それだけでは直接的な返答にならない。

だから念を押して「どうよ?」と聞を直す。

れりやと回りよひをあつてから、梨奈は首をふるふると横に振った。

「デートはダメ、どこいつ意思表示りしこ。

むへ、つまらないな。

けいかくの異常なのが

じりして行けないか、と理由を聞くと、
「そんな//ダラな//ひとにこけないんですー。」
とのこと。

全然まつたくもって完璧におかしい。

デートが淫らなら、手をつないだらそれはセクハラか？

田が合つたらそれはスケベなのか？

なんと純情乙女だ」と。

こいつヤココツヒトーテとはいかに健全なものであるかといふことを説明してやるつかと思つたが、俺は、

「お前つて馬鹿だな

と簡単こまごめんおぐ。

すると、梨奈はあんぐりと、いかにも「ショックを受けました」とみたいな感じで口を開けた。

ビーチリーグの顔で「」の主張をしてのけぬのが癖らしい。

やつぱり俺の姿じやなかつたら可愛いとか思う。

うん、
残念だ。

そんなことを思つてゐる間にやうやく今まで俺のいたその田い、涙といつた名前によっぽい液体がたまつてこた。

見た目が男だから普通に気持ち悪い。

「馬鹿だなんて酷いです……」

「馬鹿」といつ、ふやけてるときには誰でも言いつぱうなどつでもいい一文字に対して涙を浮かべるほど脆い梨奈の心に、何故か俺は感心しつつ、でも男の涙田は気持ち悪いとも思つ。

見た目が男のやつに泣かれてもな。

はつやつと言えば困る。

女の子に泣かれたときは別の意味で困る。

女の子に泣かれたときが「ちょっと困るなあ、あはは……」なら、男に泣かれたら「ちつ、何だよこいつ……」な感じ。

正直男女差別な気がしてならないが。

そのことを言いたい衝動に駆られたが、ここで追い討ちをかけるのは外道だなあと、紳士な俺の理性がそれを止めた。

で、その押さえられた衝動はどうへこつたかといつと、

「デートしようぜ」

「だからダメなんですよー。」

速攻で断られた。

……結局デートは出来なかつたが、梨奈との出会いにはこんな感じだつた。

*

元梨奈の部屋、つまり俺の部屋に俺たちはいた。

あれからやつぱり当然のように色々と悶着があつたが、もう既に三ヶ月が過ぎ、じつしに入れ替わつていいことも今では普通になつてきた。

異常が日常に変わつたある今日の頃。

三ヶ月もの月日の中で俺たちは色々と変わつたが、変わってない

「」もある。

『例えば』の間、

『なあ、 もうもうアートしようぜ』

と言つてみたら、

『まだダメ！』

未だにアートしてくれなことこのなことは、三ヶ月前と変わつては
なかつたりする。

俺としてはいい加減アートへりこしてくれてもいいと思つ。

もうそれこそ恋人並みに仲が良いわけだし。

そう梨奈に言つたら、

『恋人じゃない！』

つてキレられた。

別にいいじやん。

『仲も良くない！』

……そこまで否定されると、さすがに俺でも傷つくな。

梨奈が使っていた頃とあまり変わらない、ところどころもあって変えていない部屋の中で、俺たち一人はベッドに座り、窓の外を見ながらのんびりと時間を過ごしている。

「これって、普通に恋人同士みたいじゃない？　と言つたら間違いなく梨奈がキレるのでやめておく。

「ねえ、梨 隆司くん」

何？　と聞き返す。

普段、俺たちは入れ替わつていてることがばれないよし、お互いまでの名前で相手を呼び合つていい。

そのせいで梨奈は俺の「」とを「梨奈」と呼び間違えかけたのだろう。

やういえば、最近呼び方が苗字から名前に変わったな。

「最近、やうちのクラスはどう？」

やういえば、敬語も使わなくなつてゐる。

「特に変わつたことはないよ。やうけな？」

「「」」は席替えした。ボクは窓側の席になつたんだ

「やうか」

元々俺の一人称は「俺」だったのだが、元女の子の梨奈からしてみれば「ボク」の方が言いやすいらしく、今ではそれが定着している。

初めは不審がられたりしたらしいけど、元々俺は掴みにくい性格だったらしく、そんなことくらい普通に流されたらしい。

……ちょっとなんだかなあって感じ。

いつして日常の中でちょっとした異常をのんびりと楽しむのも良いことだと、最近思えるようになつてきた。

ちょっと前までは、とにかく派手でどんなでもない、普通じゃありえないような異常ばっかり求めていた。

そしてその求めていた異常は、いつして梨奈との「入れ替わり」という形で手に入れた。

これ以上ないくらいの異常だった。

同じ人間ではあるものの、男と女というのは意外に違うところが多く、女として普通に生活するだけで異常を楽しめる。

例えばスカートをはいているとき、普通の女子ならスカートにしわが出来ないように手でスカートを撫でるようにして整えてから座るのだが、俺は元男である。

いついう習慣があると知ったときは一種の感動を覚えた。

よく考へてるなあつて。

あとブリジャヤーは背中で止めるものだけだと想ひていたが、前の部分にホックがあるやつがあることを教えられたときには驚いた。

便利に出来てるなあつて。

他にも数え切れないくらいに異常 それこそ大きなことから小
れなこじまでも色々なものがあった。

でも、それも今じゃ田舎の一部になつていてる。

異常なんて呼べやしない。

むつくつと息を吸い込んで、またむつくつと吐く。

退屈だけど、ちょっと充実した時間。

季節もそろそろ秋へと変わりつつあって、下校途中にある並木通りのイチョウなんかもう黄色くなつてたつけ。

綺麗だつたなあ。

せついいえば梨奈は銀杏の茶碗蒸しが好きらしい。

今度作つてあげようかな、なんつて。

まふひとびとデジタルの上に寝転がった。

窓から差し込む夕日のせいで、やや薄ピンクがかつた天井がよりピンク色っぽく見えた。

「やつぱつ、

梨奈が言った。

「隆司くんは、まだ異常が好き?..」

なんでもなことを聞くんだろう。

好きといえば好きだけど、かっこいい女のところだけ好きって訳じやないしなあ。

……やつぱつは、ずいぶん変わったなあ。

「今は……ちよっとだけ好きかな」

嘘を言つても仕方ないので、いろいろと寝返りを打ちながら答える。

隣に座る梨奈の背中が、ちよつと近くなつた。

ちよつと傍に置いてあつた鞄を机のぬいぐるみを手にとって、手いたずらをしてみる。

くまさんの腕を動かしてみたり、耳を引つ張つてみたり。

鼻を顔に押し込んでみたりもした。

さう、と中に何か仕掛けがあるらしい、そんな音が静かな部屋に響く。

「やのくま、」

「くまっ。」

こじくつくるくまちゃんを改めて見てみると、やや薄汚れてる感じがあり、ヒレハリの綻びでいて繕つたあともあった。

「うん。やのくま、実は隆司くんもひつたものなんだ」

俺があげた？

……あれ？ あげたつけ？

前に一緒に行つたゲーセンでは、むしろ梨奈にFTOのキヤツチャードワードのぬごぐるみを取つてもひつた覚えがあるので。

「幼稚園の頃ね、」

梨奈を見ると、正面の姿を向いて、ちょっと丸くなつての背中があつた。

切なげに見えるのは夕日のせいだらうか。

「ボクたち、一緒に幼稚園だったんだ。覚えてる?」

えつと、そうだけ?

たしか、幼稚園にいたのは、亮介に邦夫、裕也と……あれ? 梨奈、いたつけ?

「いめん、覚えてない」

「ふふ、隆司くんらしいや。それでね、ボク、幼稚園の頃いじめられてたんだ」

少し小さめの声で言つた俺に対し、梨奈は優しく俺に笑いかける。

ゆつくつとベットから起きてから、くまさんを膝に抱いて梨奈の横に座る。

「それも初耳」

ふふ、と梨奈が笑つた。

「毎日ね、登園してくるたびに上履きが別の場所に入れられてたり、ボクのクレヨンが半分に折られてたり……」

酷いな、それ……。

「ボクのお母さんね、その頃病気がちで、送り迎えは全部お父さん

がしてくれてたんだ。それを知ったある子が、ボクにはお母さんがいなってみんなに触れ回つて……。それで次の日から、いじめられるようになつちやつた

「たつたそれだけで？」

「やつだよ？ 小さな頃のいじめなんて、みんなそんな理由。本当はお母さん、ちゃんといたんだけどね」

梨奈は俺の膝の上からくまさんを抱きかかえ、自身の膝の上に置いていた。

「これからじや見えにくいけど、たぶん微妙な表情をしてると思う。

「……いじめられて、辛くなかった？」

覗きこむよつとして梨奈の顔を見ると目が合ひて、微笑んできた。

「そりゃあ辛かつたよ。毎口毎口いじめられるんだもん。いじめられた日の夜に、毎回泣いてた」

梨奈の眉尻が下がり、でも微笑んでいる口元が堪らなく切ない表情を作り上げる。

まるで困つててゐること、それを隠せつとしているかのよつな。

「でもね、そんなある日、」

不意に梨奈が窓の外を仰ぎ見る。

つられて俺も外を見たら、外は綺麗な紅色に染まつていて、まるで空が燃えてるよくな、そんな感じがした。

「泣いてるボクの前に君、隆司くんがきたんだ」

「俺？」

「そう、隆司くん。その時にそのくまもつたの。「いつも泣いてるからこれあげる」って。いいの？ ってボクが聞いたら、隆司くん、なんて言つたと思つ?」

「可哀想だから、とか？」

「ううん、そんな普通な理由じゃないよ」

梨奈は首を振つて、夕焼けを見ながら笑う。

「「いつも泣いてるお前が泣き止んだら、異常だろ?」」だって。隆司くんらしいよね

ああ、それは俺らしいな。

正に俺っぽい行動。

その頃から異常好きだったから、わざとこうなこと出すてたんだと思つ。

そのうちの一つが、梨奈に対するの「ことだつたんだね?」。

意識なんて、してなかつたけれど。

「それ以来、隆司くんから話してくれる」とはなかつたけど、隆司くんのおかげでいじめに耐えられたんだよ？ しつかり保母さんにいじめられることを言つて、そしたらまつたくではないけど、目立ついじめはなくなつた。全部、隆司くんのおかげ

「俺のおかげなんて……それは梨奈が頑張つたからだろ？」

所詮、俺の行動なんてそのときの思ひつきでやつたことだと思つ。

そんな行動に、そこまで重みなんてあるはずがない。

「でも、隆司くんがきつかけをくれた」

梨奈が俺を見てることに気がついて、俺も梨奈を見る。

「嬉しかつたんだあ、あの時。みんながみんないじめてきた中で、隆司くんだけが優しくしてくれた。……まあ、一回だけだつたけどね」

だから。

梨奈が呟くよつとして言つた。

「ボク、隆司くんのこと好きだよ？」

……え？

「今、なんて言った……？」

「もう。隆司くんってば、仕方ないなあ」

梨奈が立ち上がった。

その梨奈を見上げると、梨奈は俺の正面に来て

「大好きです」

ぎゅっと、抱きしめられた。

元は俺の身体で……でも、今は梨奈の身体がとっても大きく感じる。

背中に回された手は大きくて、温かくて。

俺の顔の横にある、梨奈の顔は俺よりも少しだけ大きくて、ちょっとだけいい香りがして。

抱きしめている梨奈の腕は、筋肉質で、ちょっと力強くて。

……そりゃあ、デートしようとか言つたけどさ、別に好きだとかどうとかじやなくて、ただ異常を楽しんでみたかったからで。

そんなに異常が好きじゃない今でも「デートしようとか言つてるのは、ちょっと面白そうかなとか思つてただけ……。

ゆつべつと身体が離れる。

気がつけば胸はトクトクについて、なんだか部屋も暑い。

もう秋も半ばなのに。

見上げるとそこには梨奈の顔があつて、その顔は俺だつたはずのもので、俺が最も嫌つてた顔のはずで。

なのに

「ボク、異常好きな隆司くんが好きだった」

梨奈が、俺を見ながら言ひ。

「小学校、中学校は違つて悔しかつたけど……でも、高校は一緒になれた。嬉しかつたよ」

梨奈と見つめ合つてると、なんだかそりしたくなつて、俺はころんひとつベッドに寝転がる。

部屋が暑いのか、顔まで火照つてきている。

「隆司くんとぶつかつたとき、本当は告白しようとしてたんだ」

天井を見ると、心なしかわつときよよりもピンク色に見えた。

「思いつき意気込んで飛び出したらす」「勢いでぶつかつりやつ

て。……気が付いたら入れ替わって

仰向けから横向きに寝る体勢を変えると、頬に当たつてのベットのスージがちょっとぴり冷たく感じる。

「やつ隆司くんに恋なんて出来ないのかなって思つたけど、でもその隆司くんがデートに誘つてくれて」

皿の前にあるくまさんせ、これも心なしか口元が綻びていて微笑んでいるように見えた。

「異常好きな隆司くんが段々と変わつていくのは驚いたけど……でも、それも嬉しかった。ボクと入れ替わつてから変わつたって思うと」

皿を閉じると心臓の音がどびきり大きく聞こえてきて、でもそれは心地いい音で。

「だからボクは今でも隆司くんが好きです。こんなこといつと変に思われるかもしれないけど、ボク、隆司くんがボクになつてから、もつと隆司くんのことが好きになつた」

俺も、そうかもしねない。

「昔から好きだつたけど、ボクは今の隆司くんが一番好きです」

いつの間にか、くまさんがいた場所には梨奈がいて。

そつと、田を開じた。

ゆっくりと息を吸い込んで、そして吐いて。

触れた。

「初めてですか？」

梨奈が言った。

「俺もだよ」

俺も言った。

こつもひつだつたら、口笛も運くないかも。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2325m/>

異常と日常。その中で。

2011年9月19日15時24分発行